

前角老師の思い出 — 無量先生の献辞 —

今後の徹玄老師のために

「一休の遺偈」は、一九九五年五月一五日の早暁、日本にて遷化された前角老師の好きな偈であつた。

われ死せず

われは、いずこにも往かず

われ此処にあり

されどわれに何ごとも問う勿れ

われ答えず

この人に「もし死んでしまつたら」ということをイメージすることはなんと難しいことであ

らうか。老師にとっては、菩提達磨と同じく、死はないのである。武帝が菩提達磨に問いかけんとしたように、われわれが老師に問いかけなかつたとしても、いや、百年間も老師に呼びかけなくとも、老師は答えなかつたであらう。われわれ自身の仏性に、いかに問いかけることができようか。趙州と猛犬（中川宗洌老師が常にそう呼んでいたが）のように、大鑑慧能の衣鉢と百丈の鷺鳥のように、今もなお老師は青い眼の僧にあるように、われわれの生命の中に存在するのだ。そして今なおわれわれと共にあるのだ。まさに「此処」にいるのだ。今なお、偉大

な狂人の如く、甘く、辛く、怒りっぱく、洗面の、全生命と死とを含み、そして偉大な禅の祖師達や禅者達の真実の継承者の教えは、公案や問答から踊り出て輝くのである。老師の弟子達は法系の最後と初めに、突然に、朝課の供養に老師の名を聞くのだ——大山博雄大和尚と。

真に偉大なる師よ。われわれは老師に相見しえたことは幸運だったし、今なお、相見しうることは幸運なことだ。

一九七二年の九月に最初に私が師に会った時、前角老師は四一歳であった。けっして小さくは見えない小さい男性で、軽快な中にも存在感のある瘦身の男性、しかしなんと言っても瘦身の人だった。彼の大きな頭には広く長円形の半分隠れた眼と広く刻まれた口とがあった。前角老師の顔には神話的な龍の優雅な彫刻がなされていた。後年その優雅さは不可思議な幽玄に変わっていった。しかしなお魅力的だった。師は常



ピーター無量(筆者)右側と前角老師と、母堂

に魅力的であったし、柔弱さがなく、デリケートでもあった。丁度鳥が大空を飛んでいくように、師は跡を残すことなく身を運んだ。師が休息するためによつて来ると、常にその場の中心に位置した。その存在が周囲の凡てを変えるのだった。

前角老師はわれわれが師に会ったその日から、わたし達に教示した。その教えの凡てが必ずしも納得できるものではなかった。師の慈愛と遊び心のためにもつと厳しくあるべきだった。そのため師は再説するだろう。師の弟子であった人達の幾人が、前角老師の応答がまさにこの瞬間に、怠惰な僧の實踐にとつて如何なるものであるか、今まさに此処で思考することができ得であろうかと。

わが家の暖炉棚に日本の丘の傍の大きなカラの写真が掲げてある。文字いっぱいを刻んだ大きな真直ぐな石碑、極めて古いものもいくつ

かある。長い記念の木の額、花々と木々の蔭、広い大きな石の階段が急勾配の丘を下つて巨大な桜の老木の根元に続いている。今や輝やかしき春だ。大きな石段が木の下に到つたところに、黒田光純老師が、弟の前角大山老師と談笑しながら、前庭に向つて歩んでいる。(前角老師は、家系の存続のために、実母の前の姓を嗣いだのだ)。老師たちは黒衣と金襴の袈裟を纏っている。そして前角老師の第一の法嗣の徹玄グラスマン先生が背の高い、浅黒い年長の弟子のひとり随えて、小高い丘から、老師たちの跡をついて下りていく。この菩薩達は、常緑のそして赤い椿の咲く丘の上にある広大な墓地から離れた、家族の墓地での父であり、師である椹庵白純大和尚の記念法要からのちようど帰り途なのである。椹庵白純和尚の墓は光真寺と称する自坊と蛇尾川と大田原の北の市街を見下ろしている。丘の中腹の木陰は百花放斎の光と、霞かか

った太陽の光線の中で雲のような桜の花に幽玄の輝きを放っている。それはあたかも仏陀の金色の衣が、その中で光り輝いているかのようだ。

前角老師が光真寺に戻り、兄の光純老師と人生最後の日を過ごしたのは、桜の花の、この春が過ぎ去った時だった。

ロサンゼルスにおいての二十五年間にわたる教化で、師は十二人の法嗣に伝法した。そして一九九五年の早春に、上足の弟子四人が日本曹洞宗から正式に認可されたのであるが、その時老師は師家として、米国における大業が成就したと強く心を感じたことを、徹玄師に語っている。老師はある意味において、老師自身が、アメリカの禪の伝統の自由な発展の道筋に今おかれているのだと、感慨深く語っている。

そしてそれは、ある古い足場は取りはずす必要があり、日本の師たちにより創造的に設立さ

れなければならぬ。五月始めに古い友人の西脇悦道老師（長岳寺住職）を証人として同道の上日本に赴いた。老師として認可された徹玄師とその継承者達の記録と白梅会の法孫のためのトレーニンングセンターの設立と、精神的指導者としての老師の業績の出版のためである。印可の記録は次の最後の法話に現わされている。

「生生世世精進不退にして

仏祖の悲命を断絶せしむることなかれ

至切至禱」

五月十四日の夕刻、前角老師は、弟の純夫老師の東京の寺である桐ヶ谷寺に戻った。老師は日本で最も楽しく感じる時間を弟の家族と共に過ごした。翌朝、純夫老師が呼びに行った時老師は答えられなかった。

（福田孝雄訳）